

議 事 録

- 会議名 第17回佐賀県総合教育会議
開催日時 令和2年7月28日(火曜日)10時30分～11時30分
開催場所 佐賀県庁新館4階 プレゼンテーションルーム
出席者 山口知事、落合教育長、牟田委員、小林委員、加藤委員、飯盛(清)委員、
飯盛(裕)委員
(知事部局)小林副知事、進政策部長、宮原スポーツ総括監
(総合教育会議事務局)林政策総括監、他
議題 (1)教育現場における新型コロナウイルス感染症に係る対応状況について報告
(2)スポーツ振興と運動部活動について意見交換

議事録

1 開会

(林政策総括監)

これより第17回佐賀県総合教育会議を開催いたします。本日は、知事・教育長・教育委員の皆様と小林副知事と進部長と宮原スポーツ総括監に来ていただいております。では、開会に当たりまして知事から御挨拶をお願いいたします。

(山口知事)

まずコロナに関して、昨日の本部会議で配布した資料と同じものになりますが、グラフの方を見ていただいて大体御案内のとおり、5月4日に陽性者がでてから、76日間陽性者が出てなかったんですね。それが、7日間連続で発生しておりまして、昨日が0だったので、1日空いてるとというのが今の状況であります。5月16日までに再陽性が2件ありまして、一旦罹った人がもう一回陽性になられて、これまで入れて47とカウントすると、20歳から29歳以下は約20%だったんですけども、今回の7月2日以降の第二波について言うと、そのうちの9割が29歳以下という大きな特徴があるわけです。これは申し上げたように、今回、若い方で、ほとんど軽症以下です。重症者がいないということが1つの特徴であります。本当に有り難かったのが、この若い子たちは福岡でもらって来てるんだけど、そこから後、家庭とか病院とか学校とかそういったところについての展開はなかった。約240件、PCR検査をかけたけれども全部陰性ということで、佐賀県内的な余波がなかったことが、非常に今の時点で良かったということで、今すべて封じ込めているという状況であります。若い人の1つの原因が、昨日言ったクラブ、ディスコ型のちょっと朝までやってるパターンもあたりして、福岡に出掛けて行って楽しんでそこで罹った人で、また今度は一緒に食事に行って、佐賀の仲間内で行ったりして、やっぱりわざわざ福岡に行ってというパターンというのが、ある意味いくつも見られているのが大きな傾向。きっと若い人って高校を卒業した後にそうやって、みんなで盛り上げて福岡行って、というような考え方っていうか、そういう思考もあるのかなということも、いろいろ我々としては参考にしながら「当分はやめてね」と申し上げました。そういうような状況で、これからも、非常に警戒をしていかなければいけない状況だというふうに思います。PCR検査される方も非常に多いという状況です。なので、県内は、学校も含めて非常に警戒体制がとられているので、だいぶ我々もノウハウが蓄積されてきて、今のところ順調に学校生活も進ん

でいると思います。それと、今日の議題に出ました、スポーツ関係ですけれども、佐賀県はSSP杯というインターハイと、甲子園の代替大会を全国に率先して継承して、ある程度その時の判断としては、全国的に判断が割れた状況の中で、我々とするとはやはり、うちの高校生たちが将来しっかり人生を渡る上でも、毎日毎日頑張ってきた部活の成果というのを表せないまま高校が終わってしまうのがあまりにも酷じゃないかということで、私たちは腹をくくって、仮に誰かが罹るということがあっても徹底的に叩くという態勢を取った上で、みんなでやっていこうということになりまして、結果的に今、野球が、もうすぐベスト8が揃うというところで雨で止まっていて、後は柔道が8月1、2日に行われるだけになりました。ずっとこういう機会だからということで、教育長もいろんなスポーツ回って、私も励ましてきましたけど、本当に多くの高校生たちが「ありがとう」って直接私に言っていたいて、本当にやって良かったな、このまま子どもたちが何もしないままに学校生活を終わらせるというのは、余りにも逆にマイナスの面が大きかったのではないかと思うので、やっぱり生徒の想い1つ1つにしっかりと想いを馳せながら、この教育問題というのは組み立てていかなければならないと再認識させられました。その中でスポーツを支える状況というのが、段々生徒数が減っていく中で、どのような形で盛り上げていくのかという大きな曲がり角となりますので、そういったことについても皆さんと議論させていただきたいと思います。コロナや大雨災害があつたりという中で、非常に厳しい状況の中でありますけれども、しっかりと連携しながら頑張っていきたいと思います。今日はよろしくお願ひいたします。

(林政策総括監)

ありがとうございました。それでは本日の議論に入ります。今日の議題は教育現場における新型コロナウイルス感染症に係る対応状況について報告と、スポーツ振興と運動部活動について意見交換となっております。まず報告事項になります。前回3月末に教育現場における新型コロナウイルス感染症の対応について、その振り返りについて意見交換しました。その後の対応を教育長より御説明お願ひいたします。

(落合教育長)

簡単に説明したいと思います。まず学習の遅れですけれども、今年度に入ってからの一斉休校は13日間でした。その分の遅れについては、夏休みを各学校短縮して7月いっぱい学校をすることで、8月の1週前から始めるということによって、夏休みまでに概ね取り戻すことができるというふうに聞いております。次に学校行事について、できるだけやってほしいというのが我々のスタンスですけど、秋場に体育祭、修学旅行、学校としては重要な行事があります。これもできるだけ開催してほしいと、感染状況を見ながらではありますけども、今のところやる方向で各学校準備を進めております。3番目はオンライン授業ですけれども、これについては臨時休業期間中に何とかやりたかったんですけども、プロジェクトEということで、遠隔でのオンライン授業ができないかという試験もやりまして、現状では、仮に次に休校するような事態になった時には、オンラインで授業が提供できるという県立学校に関しては、その準備を整えている状況です。次に入学者選抜、来年度入ってくる生徒の入試ですけども、基本的に日程は予定通り行う予定です。ただ、試験範囲をどうするかということについては、8月までの取り戻しの状況を見ながら、もし今後また休校せざるを得ない事態になれば、試験範囲を調整することも考えないといけない。現状では、何とか取り戻せるのかなと思っております。最後に、進学、就職の状況ですけれども、やはりこういう状況の中で現在求人が出てますけれども、かなり厳しい状況であります。引き続き各企業さん、特に県内企

業さんの方には、積極的な求人をお願いしてもらおうのと、生徒たちには、こういった機会に県内就職を促していきたいと考えております。次のページお願いします。コロナ感染対策関係で、補正予算で対策をうつ主なものだけ御紹介しますと、1つは、Eプロジェクトに関するオンライン授業に関わる環境整備を行おうとしております。あと、遅れを取り戻すための、あるいは学校で消毒したりするようなサポートするスタッフの配置を、資料4ページの真ん中になりますけど、サポートスタッフの配置という予算を入れさせていただきました。また下から2番目の空調ですけれども、県立高校の中で空調が整備されていないのが4校ありましたけど、これまでPTAで設置していたわけですが、今回、夏休みも使って授業をやらなければならないということで、空調整備に今回から着手したということになります。1番下の特別支援学校は、これは国の補助金を使いながら整備したいと考えております。以上です。

(林政策総括監)

ありがとうございます。では、意見交換に移りたいと思います。今回のテーマはスポーツ振興と運動部活動についてということで。

(山口知事)

ちょっと、今日どっかの新聞で修学旅行がだいぶ行き先を変えてるという話ですが、何か。

(落合教育長)

県内では、まだ変えているという状況ではなくて、予定通りなんですけど、今ちょっと厳しくなりつつある状況の中でどうするか、今から真剣に議論が始まる。相談も受けていますので、もし予定している所に行けないようであれば、県内にどうですかということも含めて相談に乗っていきななと思っております。

(山口知事)

長崎の修学旅行は、大阪を変更して福岡・鹿児島と書いてあった。佐賀は飛ばすんだ。

(落合教育長)

佐賀県は小学校の6年生がだいたい長崎県の平和学習に行きますね。

(山口知事)

長崎県の方は佐賀県にそういう風に来てくれるのかな。

(林政策総括監)

意見交換に移りたいと思います。スポーツ振興と運動部活動についてということで、SSP構想を考える過程で部活動を通じて選手が育成されるという役割も非常に大きい一方で、教員の働き方改革などもございます。少子化による生徒数の減少も課題と御説明いただきました。今後いかに運動部活動を活性化させていくかの意見交換をお願いしたいと思います。まず宮原スポーツ総括監からSSP構想関連についてお願いいたします。

(宮原スポーツ総括監)

それではSSP関連につきまして、かいつまんで御説明いたします。スポーツ総括監の宮原でございます。よろしくお願いいたします。今回はコロナの自粛で文化活動やスポーツの色々なイベントが中止になりまして、この中でやっぱり改めて感じたことは、芸術とかスポーツに人を感動させたり、生きていく糧になる力があるなど、皆様も心の中で感じられてることと思いますし、やはり高校総体がなくなって、SSP杯をやって高校生の喜んでる姿を見ると、本当に大きな力があるなと思っております。SSP構想、SAGAスポーツピラミッド構想は、資料12ページの1番下に書いてありますように、そのスポーツの力を生かして、人づくり、地域づくりを県を挙げてやっていくというものでございます。一言でいうとそういうことです。そのために、ピラミッドの三角形の形があるんですけども、真ん中に上に向かって、アスリートの発掘・育成というのがございます。これを軸に持ちまして、多くの方が、そもそもアスリートの発掘や育成に関しましては、する人だけではありません。育てる人、見る人、それから支える人、いろんな人がつながりを持って、社会全体でやっていく必要がございます。こちらのアスリート発掘・育成を軸に、下のスポーツにかかわる人々の文化を拡大していくということを目指しております。資料7ページの左側の県民の方は、トップアスリートやプロスポーツの活躍を見て、それが佐賀ゆかりの人であればあるほど誇りに繋がったり、夢や感動に繋がると。それでアスリートの方々も、佐賀で安心して競技人生に打ち込んだり、あるいは競技人生を終えた後は、指導者としてそのまま佐賀で、次のセカンドステージを過ごせるような循環を作りまして、このサイクルが回れば回るほど、スポーツを中心に、佐賀なんか盛り上がってるな、高校生なんか元気あるな、みたいなところを目指しております。右側に短期目標・長期目標を書いてありますけれども、人づくり、地域づくりですので、何か1個の目標のためにやっているというよりも、これからずっと続いていく施策ではございますが、目の前の短期目標としましては、SAGA2023、最初の国民スポーツ大会が佐賀でございます。それからパリ・オリンピック、パラリンピックに佐賀県のゆかりのアスリートが一人でも多く出るように、これをこの構想でしていきたいと思っております。次お願いします。そういった道を通っていきまして、一番上にある佐賀から世界へ挑戦する新しいスポーツシーンを切り開いていくと、佐賀をモデルに世界に羽ばたく、地域でこういうモデルがあるんだということを皆さんに伝えていきたいし、子供たちにもしっかりとそれを感じてもらいたいというのが、この施策の肝でございます。次お願いします。先ほどスポーツでいろんな方が関係すると申しましたけれども、観る・育てる・する・支える、この中でこのSSP構想では特に支える層に厚みを増す事を目指しております。これは今までもスポーツを支える社会活動として、いろんな企業とか、もちろん学校教育現場とか、いろいろな方がやられたと思うんですけども、改めまして、社会全体でそういうサイクルを回していくんだということを宣言いたしまして、去年の11月に行政、それから経済界、医療界、いろんなところを巻き込みまして、社会全体でSSP構想を推進していくところを作ったところです。次お願いします。そのような、SSP基本構想の先ほどの三角形のサイクルを回すために、大きく、やることはいっぱいあるんですけども、3つの重点分野を設けておりまして、上から人材育成、練習環境充実、そして就職支援、これはそれぞれ見ていただくと、先ほどの三角形のサイクルが回るいろんなステージに対応しているんですけども、簡単に言いますと人材育成では、佐賀ならではの特色としては、選手も指導者も佐賀にいて一流の人が育っていくってことを目指しております。この後、部活動等、SSPが一番関連が深くなるのは人材育成ですね、こちらの方はもう少し詳しく、後ほど御説明をいたします。それと、練習環境充実につきましては、今、SAGAサンライズパークの整備が着実に進んでおりますけれども、そこだけではなくて県内のいろんなところで、SAGA2023を契機にしたもの、あ

るいはそうでないものいろんな練習環境の充実も図っております。そして、就職支援ということで、先ほどアスリートの方が安心して競技人生に打ち込めるような支援というのもしっかりやっております。次お願いします。先ほど言いました中でも、部活動のところが一番関係があると思われる人材育成のところを少しだけ詳しく御説明します。佐賀県では、スポーツエリートアカデミーSAGAといいまして、短期的な人材育成ではなくて、長期的に物事を決めていくことを目指しておりますので、スポーツエリートアカデミーというバーチャルな組織、行政組織を想定いたしまして、そこでもって競技伴走型支援というのを、まず1つやっております。ちょっと難しい言葉なんですけど、これは簡単にいいますと、水泳なら水泳、陸上なら陸上、サッカーならサッカーでいろんな競技団体ごとに、求められる支援、今必要な一流な支援というのが異なりますので、そういった競技種目ごとに、いろんな施策を行います。こちらの中に大きく3つありまして、1つが、メインが一流指導者活用長期育成プログラムといいまして、21競技26種目でやってるんですが、新体操の秋山さんですとか、日本代表のコーチレベルとか常勝監督みたいな人に佐賀にお越しいただいて、その競技団体の選手も指導者も一緒に直接指導を受けることによりまして、指導力あるいは選手の持続力を上げていくと。そういう方々に、月1回、2回ぐらい佐賀で直接指導してもらっております。

その次が、専門家サポート活用・スタディツアープログラムといいまして、これは競技団体の指導者だけではちょっと難しいICTを活用した選手の育成ですとか、栄養学の、そのスポーツにあった栄養をどうしたらいいのかっていうところに関して専門的知見をサポートしております。あと中学生などを全国レベルの大会、やっぱ高校総体の決勝ですとか、そういうすばらしい大会を見てもらうことによって、自分たちも頑張っていくんだとか、一流の選手の競技を見てもらうための動機付け支援をしております。最後に一流育成機関等提携プログラムとしまして、これはまたスポーツ界、全国、世界のスポーツ界にはいろんなスポーツに特化した素晴らしい機関がございまして、そういうところと連携しまして、例えば、テニスの錦織選手が所属して世界的プレーヤーを輩出しているIMGアカデミーの方からコーチを招へいして指導者と共にレッスンを受けて地力を上げていくとか、味の素ナショナルトレーニングセンターとかで、勝ち飯、どうやったらアスリートとしていい食事になるかみたいな事を佐賀で指導をしてもらってるところでございまして。それから1番下に、今後コロナとかで試合ができない、あるいは練習ができない選手のメンタル面のサポートを今回強化するようにしております。次お願いします。もう1つが、競技伴走型支援と個人伴走型支援といいまして、今、競技団体ごとに支援を行っておりますけれども、それに合わせまして、切れ目のない支援をするために、個人に着目して何々選手、テコンドーの濱田選手とかに着目いたしまして、SSPホープアスリート、ライジングアスリート、トップアスリートと、それぞれ世界を目指すところから、日本トップ級の方々を認定させていただきまして、助成・保障・費用を御支払いする事によって、これまた充実した練習、選手生活を送っていただくということも行っております。つい最近では、ラグビーの津岡選手とかが、トップアスリートに認定をさせていただいたところです。次お願いします。こういった施策全体でそういうことをしてありまして、その中で当然、育成指導の中では、学校の実際のフィールドとしては部活、あるいは高校の現場で授業を行われることも結構ございまして、こういった拠点、鳥栖工業ですとか佐賀工業、いろんなこういう施策を通じまして、佐賀県としては、今、レスリング・柔道・ラグビー・新体操、この辺りが、全国大会でも強豪になっておりますし、他県からぜひその高校で学びたいということで、選手が入部もしたりもしております。次お願いします。最後になりますけれども、今、施策全体では社会全体でいろいろなSSP構想を支える仕組みがあるんですけれども、今日のテーマで申しますと、人材育成と練習環境の充実とい

うのが、多分現場には関係すると思ひまして、簡単に表にまとめております。人材育成、繰り返しになりますけれども、先ほどありました一流指導者活用等長期育成プログラムなど、これは競技団体ごとにやってるんですけれども、指導の場としては鳥栖高でやってみたり、佐賀女子高でやってみたりということがございます。それから、もちろんSAGA2023に向けた強化指定校、いろいろ競技種目ごとに部活動を指定しまして、強化・育成の支援をしているところでございます。最後に、練習環境充実ということで、SAGAサンライズパーク、アリーナを初め、いろんな整備をしておりますけれども、その整備が県立高校に整備する施設等も結構ございまして、多久の弓道場ですとかボルダリング、あるいは伊万里のホッケーなどは、部活動でしっかり活用していただいて、地域の拠点になっていくというようなことになろうかと思ひます。以上簡単ではございますが、SSP構想全体としてはこういうことを目指してやっておりますが、その施策の一個一個につきましては、やはり学校現場の方々の御協力と御理解というのが大変重要な要素になってくると思われまますので宣伝をさせていただきます。私からは以上でございます。

(林政策総括監)

ありがとうございました。続いては、教育長から資料の御説明をお願いいたします。

(落合教育長)

私の方から、運動部活動の状況というのを、議論の前提になる現状というのを中心に、御説明したいと思います。冒頭知事の方からありましたけれども、今年コロナの影響で高校総体とか、あるいは高校野球が中止になりました。そういった中で、SSP杯を代わりの大会として開催して、知事にもいろんな会場に行ってもらいましたけど、私も見たことのないようなスポーツをいっぱい見させていただいて、そこで高校生たちの様子を見まして、改めて学校部活動の意義とか価値とか、そういったものを再認識したところであります。ただ、学校部活動がこれまでどおり今後も続けていけるかということになると、これから御説明する様な状況があって、今後なかなかこれまでどおりにはいかない、学校部活動を価値のある状態に続けていくためには、いろんな取り組みが必要だというふうな認識を持っています。次お願いします。まず、2つの状況ですけれども、1つは教える先生側。これまで部活動というのは先生たちに支えられて来た訳ですけど、昨今の国の法律、県の条例ですけれども、教職員の働き方ということで、勤務時間の上限が設定されております。時間外では月45時間、年360時間でキャップがはめられたという状況です。これまで部活動は、こういったものを超えて、先生方のボランティア精神と熱意に大いに支えられてきたわけですけれども、そういう制度上キャップをかけられたということと、もう1つ、下の方は適切な休養日。これはむしろ選手側のやり過ぎを防ぐという意味合いであるんですけども、休養日を平日、週休日に設けるとか、あるいは活動時間を平日2時間、休養日3時間、こういう様なキャップがはめられています。この下の適正な状態どおりやっても月に44時間ということで、教員側から見ると、時間外の全てをこれにつぎ込まざるを得ないような条件になっている。そういう、教員側の制約の問題も出てきているということです。次お願いします。それと、もう1つ少子化の影響なんですけど、平成21年からこの10年間で、生徒数が中学校で3,800人、高校で3,300人減っています。部活の数、部活の数を、県トータルで見ると中学校で52部、高校で19部減ってきているということで、どうしても全体の人数が減る中で、縮小せざるを得ない部分が出てきているという状況があります。それともう1つは、主に中学校ですけど、資料の17ページ右下の方ですけども、高校はどちらかというと専門的な指導が可能な状態になってるんですけど、中学校の生徒数は、その地区の子供の数によって毎

年変動することで、先生がなかなか固定した上で指導してもらうのが難しくなっている状況にあります。それともう一つは、顧問も先ほどの制約をクリアするためには1つの部を2、3人の先生で見ればいいわけですが、逆にですね、1人だけで見てとか、逆に1人が2つ以上の部活を掛け持ちしているようなところも16%ぐらいありまして、なかなか人手不足の中で、そこがクリアできていない。資料17ページ右下は、そのスポーツの経験が全然ないままに部活動を指導するっていう割合も37%ということで、そこから頑張っただけで指導者として立派な指導をしていただく人も沢山いらっしゃるんですけども、仕事として割り当てられてやらざるを得なくなっている人も沢山こういった中でありまして。次のページをお願いします。そういった中でその性質と課題ですが、競技力向上との考えということで、特に中学校の方で選手育成・強化という視点で見た時に、その体制が十分と言えない部分があります。それは、次の方にもありますけど、もともと自分がやらないスポーツを見るような感じが多いですので、なかなか専門的な指導ができない。あと、生徒数による全体の縮小、部活動は全体として縮小せざるを得ないけど、いろんなニーズがあって新しい部活も欲しいという声も出てきたりというのが下から2番目。それと顧問数、少子化の中で先生の数も減るわけですけど、なかなかその部活の指導体制が組めないという課題があります。今後の方向性はざっくり書いてますが、一つはトップ選手を育成しようとした場合、そういう指導体制があるわけですけど、そこをどうしていくのか。あと、各外部の指導者の確保・活用を今後進めていかなければならないと。また、部活動数については、学校の中で見られる部活の数が限られてるので、どうしていくのかっていうことと、地域との連携、これがキーになってくると思うんですけども、学校部活としてこれまでクロースで学校の中で、指導も生徒にやってきたんですけど、1つの学校で成り立たなくて合同チームにすると、そういったことが進むと、だんだん地域クラブとの垣根っていうか境目が曖昧になってくるので、むしろ積極的に地域との連携、あるいは地域クラブ、社会体育の連携なり、融合というのを考えていかなければいけないかなと問題意識はあります。以上です。

(林政策総括監)

ありがとうございます。様々な課題があるなか、ここから意見交換に入りたいと思います。御議論いただいた事が決定事項になるわけではありませぬので、御自由に御発言いただきたいと思ひます。残り30分弱なので教育委員の皆様から、何か今までの御説明で、御質問等でも大丈夫です。

(飯盛(清)委員)

ピラミッド構想ですね。トップの育成と裾野の充実、どちらも非常に大切な部分だと私も考えます。特に佐賀県関連の選手・チームが活躍すれば元気になる。半年前、男子の都道府県駅伝で一時トップに立ったりとか、中学生が今年高校1年生の記録会で、歴代の1,500メートルの高校1年の日本最高を出したという話を聞いております。逆に、最近ここ数年のサガン鳥栖、久光、あまり調子が良くないみたいですね。数年前は良かったかと、そういうトップの方の活躍。それと、私は小学校現場が長かったので、そちらの方で部活動というか、そちらの方を話させていただきたいんですけども、小学校の担任をしていた時にお母さんが、その子供さんは、少年野球をやっている。一生懸命。少年野球は今もそうなんですけど、練習試合になるといくつかチームが集まるので朝から夕方まで。夕方やっと帰ってきたと思ったら直ぐまた出ていくと。「何しに行くの?」と聞くと、「野球しに行く」と。それが何かスポーツの本質っていいですか、自分の好きなようにやれるっていうところへんかなというふうな気がしてました。その話を聞いて、自分自身も、生涯スポ

ーツ、走ることで実践してるわけですがけれども、人から言われて走る10kmより、自分が必要と思って走る20km、30kmは楽しいものですし、身になっていくんです。学習指導要領では部活動のことを自主的・自発的なものを目指すべきであるというふうにある。それから、結果として、責任感・連帯感などが身につくことが期待されるということが書いてあるようです。また、さっき知事がおっしゃったSSP杯の人間づくりといいますが、そこら辺りのことと関連することが書いてあります。ですから、1つの好きなスポーツ、好きな人たちが集まって、工夫し、練習していて上手く進んで、無欲のうちにあれよあれよといううちに、例えば全国で勝ったというようなのが、佐賀商業、佐賀北高校の甲子園の活躍であったりとか、良い例ではないかなというふうな気がします。ですから、勝つことが先に来ると部活動の本筋から逸れていくような気がします。現状いろいろ課題はあるんですけども、最終的にはどれぐらいかかるかわかりませんが、国や県が示している指針に沿ってですね、全ての学校内でやっている部活動が、そういう方向を目指していくべきかなというふうに考えております。以上です。

(林政策総括監)

ありがとうございます。他の御意見ありませんか。スポーツと言えば、飯盛(裕)委員にお願いします。

(飯盛(裕)委員)

私は、小中高ずっと水泳をやっていたんですけど、まずSSPのピラミッド構想で、随分知った人たちが指導者として関わられてるなと感じています。新体操の秋山さんは私が海外にいた時に、日本チームのボランティア通訳を担当させて頂いた際にしてもらって仲良くなってお姉さんのような感じなんですけど、この間も佐賀女子高校に指導に来てた時に、ちょっとお話をさせていただきました。幼なじみで水泳で日本一になった友達も、今、公立高校で水泳の監督をしています。いろんなところで、そういう佐賀のゆかりのある人たちが活躍するところがあるのが凄く素敵だなと思います。部活動に関しては、私の父が卓球の顧問だったんですけど、ちょっと働き過ぎで体を崩して私が15歳ぐらいの時に亡くなって、まあそういうこともあったので、働き過ぎを抑制する動きというのも凄く関連していると思います。

(牟田委員)

先ほど落合教育長が言われたとおり実感してるんですけど、息子はバスケをずっとやっていて、小学校は完全に学校単位の社会体育、ミニバスはそうなんです。これが中学になる途端にバスケにおいては各学校の部活動になって、息子曰く佐賀県はバスケのレベルがその段階にガクッと落ちるようになる。強い人は、高校レベルになると長崎や福岡の私立に行く。高校でも経験がない先生が教えたりするからですね。だから、それをカバーするためには経験者を各学校に派遣、付けなければいけない。非常に大変なことなんで、いずれ中高も実力をつけていくためには、社会体育を強くしていけないのかなというのも思うんです。ふとさっき思ったんですが、武道、柔道・剣道・空手とかいうのは町の中に道場とかいうのがあって、各学校でやっている生徒たちはそういう所に行ってやってると思ってるんですけどね。またちょっと変わるんですけど、社会体育で小学校の時の親というのは負担が大変なんです。練習に連れて行ったりどっか行ったりとか。私も、小林さんが言ったけど、それが中学校になると急に楽になっちゃって良かったねとなると、その負担を誰がしてるのかということ、多分学校の先生がしている。スポーツ・部活をするためには、

誰が負担をするのかということも結構大きな問題になるんです。学校の先生も今後時間短縮になってくるから、社会体育の割合が増えてきてその負担は親とかだし、まさに行政機関かもわかりませんが、していかなくちゃ強くもなれないし、先生たちの負担も減らせないのかなというのを実感しております。以上です。

(林政策総括監)

ありがとうございます。

(小林委員)

私も子どもが3人とも運動部の部活で、でもそんな強い方ではなくて、それなりにという方ではあるんですけど、やっぱり保護者の負担が中学校になったらちょっと楽になるって言われましたけれども、送迎は必ず保護者がするようになってるし、送迎当番があるとかですね。部活動によっては道具を一式揃えるお金がかなりかかるとか、ユニホーム以外にも練習着が何枚もあるとか、結構、元々お金がかかるような中学校の部活動もあって、保護者さんの中には、子供に本当は「何でもしていいよ」と言いたいけれども、やっぱりお金の負担、送迎の負担を考えると、それがないところを選んでと言わざるを得ないとか、どうしてもそれがなければ「部活ごめん、せんで」と言うしかないという声も聞くので、教育現場である部活動だったら、誰でもが自分で選べて負担が無くなればいいのかなと思うんですけど、ちょっと華美になって、いろいろ持ち物が増えたりとか、そういう所を考えながら、子供たちが自分が本当にやりたい競技を選んでいける、それを安心して、さっきのトップアスリートさんもありましたけれども、子供たちも安心して部活に取り組めるような環境ができたらいいなと思います。あとは部活の指導の時に、だいぶなくなったと思うんですけども、どうしても厳しい指導の仕方がまだ根強く張っていて、時々練習会場だったり試合会場で暴言と言われるような声が聞こえてきたりとか、やっぱりそれはなかなかなくなるいなと。そこがこれから子供たちが、実力をどんどん発揮して力を付けていくためには、その指導者の意志といえますか、大事ななと思います。バレーボールの益子さん、監督が叱らない体験をやりますというのを見て、何かとって子どもたちが生き生きとやってるのを監督さんも気を付けているけど、つい言っちゃって「あっこれか」というのを御自身で気づかれる場面もあったんですけど、ああいう指導者の方たちも学んでいただいて、伸び伸びできる環境ということも作れたらいいかなと考えています。

(林政策総括監)

ありがとうございます。

(加藤委員)

私は、今画面に出ているこれからの高校生と運動部活動の在り方ということで、部活動数の精選を地域との連携というところは、これからの役に立つんじゃないかなと思いますが、私、白石町出身なので、白石アスリートというのがあるんですね。白石アスリートは、白石町には、県立高校2校あって、地元の小中高の合同練習をしていて、何の競技でもいいと思うんですけども、強くしようと思えばそれに特化したりとかして、その自治体の独自のスポーツの特化というか、そういったところを自治体自体が、もう少しSSP構想とかをきちんと知ってもらって、同じ自治体と県の意向が一致して、自治体独自のスポーツということを特化していけば、自治体もいいし、自治体も責

任をもって補助金を出すとかそういうふうになっていけば、自治体もその町で、うちの町は、これが盛んですよとかというようなのを、高校がないところでも小中の義務教育の過程ではやれるんじゃないかなというふうに思いました。

（林政策総括監）

市町でも、それで特色出せるかもですね。ありがとうございます。宮原スポーツ総括監、本当いろんな多角的なご意見を頂いております。

（宮原スポーツ総括監）

今、私の方で所管してます、国体が、今度初めて佐賀から国民スポーツ大会と名前が変わるんですけど、それで私たちが議論してるのは、「体育とスポーツの違いはなんだろう。」と、体育からスポーツに変わったからこそできることはなんだろうみたいなことを、何十時間も議論をします。その中で結論めいたものがないですけれども、やはり先ほど飯盛（清）先生が言われた、自発的なもの、やっぱりスポーツは自発的なものであって、その先に何か結果が付いてくる、あるいはその中でも、自発的にでも厳しい道を選ぶ人には厳しい場がちゃんと用意されてるような事がきつと大事なんじゃないかなということは、薄っすら考えておまして、いろいろ議論する中で言葉の定義で、ブリタニカ国際大百科事典で、体育というのは身体運動を通して行われる教育。やっぱり教育ですよ。スポーツは、人間が楽しみと、よりよき生のためにみずから求め自発的に行う身体活動って書いてあって、何かそこにちょっと私たちは体育とスポーツの違いのヒントを見たところなんです。なのでその教育現場の中でも、そのバランスみたいなのが、何かどうとれるのかなと先ほど教育長のほうからあった、やはり先生たちの負担の問題とかをどう軽減していきながら、ただ、本当にその上を目指す子供たちにどういう場が与えられるか考えるべきかなと、思いながら受け止めながら聞いておりました。

（山口知事）

この問題非常に悩ましくて、私知事5年目でずっと人の話を聞きながら考えて、SSP構想はいい構想だと自負しているけど、簡単に言うと現場を因数分解すると、トップクラスの人たちというのは、もっと練習したい、そこに携わるプロフェッショナルな先生方は、もっと部活やらせる、むしろそんな休養日や練習時間の制限かけるなっていうタイプの熱血先生が実はおられます。そういうところには、むしろ県外からも生徒が集まってきたりするし、逆の例で言った長崎や福岡に行ってしまうパターンもあります。片や、部活に一旦入ってしまったけれども、厳しい先生がいたりして叱られたりして辞めちゃいました、もう耐えられませんかって言って辞めた。そうすると何となく学校の中で居場所がなくなって、もう学校すら行きたくなくなりました、という現場もある。そこにまだ真ん中がある訳ですね、まず部活を楽しんでいるんなことをやりながら、たまには試合にも出たいしさと。いろんな人たちがいて、先生もそれぞれプロフェッショナルもいれば、たまたま行った学校で自分のやったことがない、それこそバスケなんて知らない先生がいるからね、やり方もわからないっていう中で、とりあえず担当する先生もいる。そういうような人が学校という組織の中で一緒くたになってしまっているから、そこをどういうふうに分化させていくか整理して、さっき言った社会体育というスポーツクラブというものをうまくどう組み合わせっていくのかっていう所を紐解いていかないときっとこれいっぺんに議論すると、その多くの議論がごちゃごちゃになる。これを整理しながら議論していくとどうかな。

(宮原スポーツ総括監)

はい。それを言いたかったです。

(山口知事)

そこにね、いろんな声を聞いていくと、皆スポーツ好きで詳しいと思うから、その中でいろんな歪が起きた時に思いがそれぞれ違ったりとか、親も違うし、本人も違うし、先生も違うしという様な環境の中なんで、どういうふうにしていくものか。

(飯盛(裕)委員)

その社会体育、クラブのことなんですけれども、私はもともとスイミングを小学校ぐらいから始めて中学・高校では部活動をやっていたんですけど、学校の部活でこう言う言い方したら申し訳ないですが、水泳の専門的な技術を得たというのは多分無かったですね。やっぱりスイミングでずっとやって、スイミングでそういう専門のコーチに技術を習って、自分のタイムを伸ばしていくというスタイルだったので、中学・高校の部活に属したのは、要は中体連と高校総体とかに出たかったからで。

(山口知事)

スポーツクラブって、水泳もそうだけど相手に合わせてやるよね。上は上でガーっとやるよね。

(飯盛(裕)委員)

基本(普通コース)のスイミングのチームがあり、ある一定の距離以上泳げる選手を対象に強化コースっていうのがあります。その強化コースの上に、県の選抜のチームがあって、そこで朝練だったり学校が休みの期間中は強化合宿をしていました。

(山口知事)

相手のレベルに合わせた形でのあれがあるけど。ある部分、学校で取り上げると、ひとかたまりで習わざるを得ないので、この辺りというのが、1つヒントっていうか、かと言って正式に出るためには、やはり日本の教育制度は、学校中心なんで。中学・高校は。

(進政策部長)

学校に属してないと。

(山口知事)

いわゆる競技大会に出たいから、サガン鳥栖のジュニアから東福岡高校に入ったりするわけですよ。

(落合教育長)

今、私はどちらかというとクラブチームでサッカーをやってきた側なんですけど、改めて学校部活動の良さというとか何かというと、中学だとですね、自分が通っている学校で入れる、一番コストが時間的にもコストが少ないということと、指導者のさっき言ったみたいに、強制的にも仕事としてやらされている。裾野を広げるには凄くいいんですよ、入り口がハードル低くて。ただ上を育て

ていくように適してるかという、よっぽどの指導者じゃないとなかなか難しいところがあって、そこが今、サッカーとか硬式野球という形で中学生レベルで、クラブチームに選手が流れてる状況が出てきているのかなと。そこを両方の良さをどう生かして行くかなっていうのは悩みどころであります。あと高校に関してはもう少しそれぞれの学校に応じて、もう少しピンポイントに見えてきてるところがあるのかなと。全体一緒にどう仕組みを変えるかと最初かなり議論していたんですけど、今思っているのは、学校によっていろいろ特色なり強みがあるので、モデルになるものをつくって行って、いろんな学校がそこを真似して行くようになったりしたらどうかと、例えば、さっき一覧表であったような鳥栖のレスリングとか体操とか、神埼の新体操とか、指導者がいて施設があってそこに高校生だけじゃなくて小・中学生も地域クラブ化しているわけですね。そういう形を進めていくパターンだったり、あるいは外部の環境があって指導者がいて高校はいくつかぶら下がっている、インターハイに出る時だけ学校の看板を掲げてるという状態ですね。

(山口知事)

学校の看板ね。関連して言うと、今回いろいろ気付いたのが、やっぱり、生徒は顧問の先生にくっついていくね。だから、多久から鳥栖に通ったり、バドミントンは鳥栖から唐津南に通ったり、陸上は大牟田から佐賀北に来たりとか。今度先生が変わると、またそっちに振り替わったりとか、その辺、教育委員会でお考えあるんですか。

(落合教育長)

高校はある程度ですね、国体をにらむとどっかの高校に指導者がいて、施設があって、選手も集めてこれるような環境というのは人事面もやれる。小中学校は難しくなっていて、市町でそれぞれそういうのでなかなか全体調整が難しいところがあります。中学校は、さっき言ったみたいな要素も含めて、なかなか上を伸ばしていくところに中学校で貢献していくのは、現状では難しいですね。

(山口知事)

この前、野球を見に行ったら、太良高校の永尾さん監督やってるけど、あれは永尾さんは学校教育だけど、外から呼ばれたコーチ、ああいうやり方というのは活用方法があるんですね。

(落合教育長)

外部指導者。今制度として認められているので。前は外部指導者は責任を持った立場になれなかったけれども、今はそれが可能になっています。

(山口知事)

学校にありながら、社会教育的なやり方っぽくはできるのか。外部指導者を上手く活用すれば。

(進政策部長)

指導者制度がある。

(落合教育長)

そういう良さがあるんですよ。学校部活というのは。

(進政策部長)

勉強は鳥栖高校でやりたいけど、部活は鳥栖工業でやりたいとかは駄目なんですね。

(山口知事)

龍谷に行ったけど、フェンシングやりたいから、練習は佐賀商業で一緒にして、試合は別で。

(落合教育長)

進部長が言ったようなことは、大会の仕組みだったり、あるいは協会のやり方だったりの問題なので、各学校、あるいはスポーツ協会がどうするかという話で、そういう高校総体というのは学校単位でしか出れないので、合同チームはあるけれど。

(進政策部長)

地域スポーツとかで出る時は必ずそこがネックになるんですね。

(落合教育長)

個人競技だと、そういう他校での指導を受けることができるけど、地域スポーツになると、学校の看板を背負っていかなきゃ高校選手権も出れなかったりするので、ああいう枠組みを変えて、もう少し柔軟性を持たせればもっと融合が進むと思います。

(進政策部長)

サガン鳥栖のジュニアチームは、高校総体とかは出れないんですか。

(落合教育長)

そっちはそっちで、クラブの世界があるんだけど、両方一緒にリーグ戦は協会主催で、垣根はなくなってるんですよ。それが選手権とかそういった形になってくると、高校もあるしクラブもある、そういう状態になるんじゃないかと思います。でも、いろいろ意見交換できるんだろうから、簡単には。

(飯盛(裕)委員)

私、佐賀西高校だったんですけど、水泳部に属してはいたものの学校にプールがないんですよ。

(山口知事)

プールがない。

(飯盛(裕)委員)

昔あったらしいですけど。

(山口知事)

水泳部はあるんですか。

(飯盛(裕)委員)

水泳部はあるんですよ。練習は佐賀北高校に毎日授業が終わった後に行って、そこで合同練習をして、県外の遠征とか県内の九州大会とかになると、致遠館とか佐賀東とか、まとめて一台のバス借りて行くようにしてました。多分、顧問の先生たちの負担も減るんじゃないかと。

(落合教育長)

個人競技だと、そういうのがやりやすいんですよ。

(宮原スポーツ総括監)

水泳とか、テニスもそうですけど、町にちゃんとスクールがあって、そこに部活に行きながらそういう環境があるのと、スクールの先生に教えてもらうのと、経験のない学校の顧問の先生が教えるのと、教える人いませんだと、またちょっと違うと思います。

(飯盛(裕)委員)

水泳・テニス、多分、野球・サッカーの団体競技とは違いますよね。

(宮原スポーツ総括監)

確かに剣道とか柔道とか、町の道場とかで。

(林政策総括監)

三養基に進学した剣道の女の子がいて、指導者が三養基が強いから、三養基まで進学した生徒が。いろいろパターンがあります。

(飯盛(裕)委員)

この前面白いなと思ったのが、今、佐賀女子高校で出てますけど、ちょっと練習を見に行ったら、佐賀女子に秋山さんが教えに来てましたが、その横の面に、やっぱりジュニアの子たちが来ている。ジュニアの子たちもトップアスリートのオリンピックの指導方を見る機会があるから、そういう場が浸透するわけでいろんな所で、増えればいいのかと思います。

(山口知事)

レスリングなんか、この前、伊調さんと呼んだりしてジュニアと一緒にやったりとか、男子もやってるね。あとは、サッカーとか大量にリーグ・部活があって、その人たちに陸上とか他の部活動をやってもらいたい。1学年で6,000何百人の高校生なんだけれども、例えば、サッカーとか野球って競技人口、高校だけで1,000人を超えてるんですよ、ほとんどそこで食っちゃってる。だから今回は、25人、ベンチ入りでSSPに来てて、入れない子たちに、陸上の1種目やるとか何かせっかくだから試合に出してあげたいと思ったり、でもやっぱり100人いるサッカー部も仲間って言えば、指導者は、みんな俺たち全員で頑張るぞって。それだったらなかなか抜けられない。難しいね、部活って。

(落合教育長)

100人抱えると人材を無駄にしていると思いますね。社員でいうならせいぜい120人ぐらいなら。

(山口知事)

指導者も確かに多過ぎると思っけていても、それは流石に言えないという。みんなが一生懸命にやろうとしてるのに、「お前多過ぎるから」とか。

(落合教育長)

そんな「来るな」とか、なかなか言えないですね。

(山口知事)

本当は定員制とかあってもいいのかなと思ったりするけど、また逆の悪い意味もあるからね。「俺たち入りたいのに」と難しいよね。勉強だと大学で、進路で哲学は何人とか定員があったりするんだけれども。なかなか難しい。

(落合教育長)

定員があってもいいのかもしれないね。

(山口知事)

問題提起してもいいのかな。要は、使えないからね。西高校のテニスコートに100人来たら困るだろう。

(落合教育長)

別のチームで活躍してもらって、別の競技にチャレンジしてもらって、そっちの方が本人のためにもなりますね。

(山口知事)

そういう試運転があるといいよね。意外とやってみると、高校生って何気なしに部活って選んでるよね。たまたま親が、たまたま友達が行ったから。実は真面目に考えてないんだよ。もしかしたら活躍の場面もあるのかもしれない。

(飯盛(裕)委員)

何か最近、ニッチなスポーツで上を目指す、子どもが上を目指す保護者が増えてますよね。競技人口が多い所にポンって入っても、やっぱりチャンスが減るから、だから競技人口が少ないスポーツに入れて、そこから育成させると、国体など全国大会に出場するチャンスは増えるのではないかと思います。

(山口知事)

水泳もっと強くしていいよね。あと、フェンシングとかは一番チャンスだよ。あんだだけ日本の指導者が佐賀は特別扱いしてくれていて、そんな広くないんだから、そういう所に行ってくると、逆に一人一人に。

(宮原スポーツ総括監)

選択肢をいっぱい与えられる場を、私はこれに向いているみたいな事業を今年。

(山口知事)

具体的に佐賀県のSSPなどでやれてるとなると、全国、世界から人が集まってくるという佐賀に、というところまで高めて行きたい。地域振興そのものに、スポーツの力を。

(小林委員)

さっきのマイナズというものの、スポーツを知らないんですね。選択肢の中にそもそも無く、それを小さい時から、こんなスポーツもあるんだと。私、フェンシングなんて、だいぶ大人になってから知って、なのでそういう目に触れるような仕掛けがあると、あんなこともできるんだ、それも佐賀でできるんだとなると、そういう風にサッカー部100人よりは、やっぱりこっちやってみようかというようになるのかなと思うので、そういう所をよろしくお願いします。

(山口知事)

本当そう思う。結局自分が幸せだといいわけだから、ついつい大きい大企業に就職しようとするのと一緒で、入ってみたら「えー」みたいなことが良くあるのかなと。

(小林委員)

自分の力が発揮できることが、いろんなところにあるといいなと思います。

(飯盛(裕)委員)

この前のSSPの結果を見ていたら、私は平泳ぎだったんですけど、平泳ぎの1位になった県立高校1年生の男の子でしたが、世界に通用しそうな記録でしたね。すごく速くて、コーチしていた沖田くん(北島康介の前の日本記録保持者)が教えてるので、昨日もちょっとやり取りをした際に「頑張るよ」と言っていました。

(宮原スポーツ総括監)

じゃ、ずっと佐賀で。

(山口知事)

さっきのSSPで、トップアスリートで飯食えるようにしてあげたい。ずっとスポーツ選手だけでやって途中で苦しい時代、30代、40代で苦しんで指導者としてっていうシステムをやれば、彼らもスポーツに打ち込めて佐賀に残ろうと思ってくれるっていうところを狙ってる。やっぱりバスケで気付いたけど、女子も男子も高校出ていくんだよね、強い選手が。悲しいよね。去年は女子バスケはね、国体で2回勝ったということで少しいい感じになりつつあるので、そういう感じになっていくといいけど。今度、指導者にスポットライトを当てようと思っていて、今度雑誌作ろうな。いろいろ佐賀県で作ってきたこれまでの、やっぱり、バスケはバスケの会場でっていう文化が、何十年前のレジェンドみたいなスーパーティーチャーがいてそこにもっと脚光を浴びて、どんどん野球は野球、ラグビーはラグビーでそういう風にやると、みんながそうやって指導者って格好いいんだなとなってほしい。

(林政策総括監)

時間も参りましたので、今回課題は様々ありますけれども本日の意見交換の内容を今後の取組に

活かしていただきたいと思います。これを持ちまして佐賀県総合教育会議を終わらせていただきます。ありがとうございました。